

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 ^{いまい}今井 ^{たかし}上

本論文は、『源氏物語』の精緻な表現分析を通して、その心理描写や人物造型、物語世界形成の方法を究明したものである。はじめに本書全体の問題意識と分析方法を明晰に提示した序章を置き、本論は三部に分かたれた十章から成る。

第一部「作中人物に関する表現論的研究」第一章「情け・六条御息所と光源氏」では、一般に六条御息所の、光源氏の正妻葵上に対する嫉妬・怨念がその生霊化を招いたと解されがちであるけれども、物語本文に彼女の嫉妬・怨念を語る言葉など無いのであり、「情け」すなわち真情を矯めて演じねばならぬ貴族的優雅さの抑圧こそが、その生霊化の基底をなしていたのだとする。そして第二章「六条御息所 生霊化の理路」ではさらに、御息所の和歌や心情表現に頻出する「憂き」という言葉が常に「浮き」を響かせつつ、それがやがて身から「浮かれにし心」すなわち遊離魂の生霊化を必然たらしめてゆく過程を克明に析出し、和歌的な表現によって心情がかたどられてゆくこの物語の心理描出が、近代小説の写実的な心理描写とはまったく位相を異にするものであることを明らかにしている。第三章「朝顔姫君の形象と主題」は、朝顔姫君が六条御息所と常に対比して描かれていることに注目し、この姫君のになう主題を明らかにする。第四章「光源氏論」は、湊標巻以後の光源氏について、撰関家的な権謀術数に長けた政治家に変貌するという従来のもう一つにも現実的水準に引き寄せた読みを鋭く批判し、やはり物語本文に即した読みから、光源氏の理想的な人間性と超越性を彫り深く浮かび上がらせている。

第二部「作中和歌に関する表現論的研究」の三章はいずれも、作中人物の和歌が、先行和歌や漢詩文の引用によって、一種のドラマティック・アイロニーのように、当人の与り知らない意味を帯びつつ、物語世界の生成に寄与している事例を指摘し、そのような作中和歌表現の諸相を多面的に解明している。第三部「構造に関する表現論的研究」の第八章「平安朝の遊離魂現象と源氏物語」では、生霊に関する平安時代の資料を博捜し、六条御息所の生霊化におけるこの物語独自の様相を浮き彫りにしている。第九章「松風巻論」では、松風巻の光源氏が、史上の嵯峨天皇や宇多上皇を髣髴させることを指摘し、光源氏が後に准太上天皇になるという物語展開の上でこの巻の有する意義を闡明する。第十章「宿木巻論」では、宿木巻の年立て上の問題に関する従来議論を根本的に批判し、宇治十帖後半の始発となるこの巻固有の時間構造と語りの特徴を明らかにしている。

このように本論文は、貴重な新見を数多く提示している。そのなかには若干、なお再検討を要するものもあり、また 近代的な解釈 に対する批判には、やや性急な一面化も認められるものの、しかしながらたしかに近代の小説の写実性とは異なるこの物語の心情表現や人物形象、物語世界形成の方法を丹念に明らかにした功績は高く評価される。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。